「老いらくの恋」・東西の系譜（三）

増田　裕美子

第二章　笑話の世界

ローマ喜劇に現れた滑稽な恋する老人たちの兄弟とも子孫とも言うべき人々を、まず中世の笑話の世界の中に探ってみよう。ファブリオ(fabliaux)と呼ばれる中世の笑話において恋する老人たちは若い女の夫となって登場するが、その代表的な話として以下にチョーサーの『カンタベリ物語』の中の「商人の話」を取り上げてみたい。

一

「商人の話」の主人公は、イタリアのロンバルディアに住む裕福で立派な騎士である。彼はずっと独身のままであったが、六十歳を越えてから「信心からか耄碌のせいかわからないが」[1]結婚しようと思い立つ。彼が言うには、「結婚生活は安楽で清浄でこの世の極楽である。」

作者はここで老騎士の言葉に賛意を表して結婚を是とする結婚論を展開する。「妻をめとることはすばらしいことだ、とくに男が年老いて白髪になった時は。……（中略）……その時彼は若く美しい妻をめとらなければならない、子が授かり、喜びと慰安の生活が送れるように。」

後の話の筋を考え合わせるといささか皮肉な調子にも聞こえるが、作者は大真面目で結婚擁護論を続けて曰く、「結婚した男は自分の土地で結婚という絆につながれて幸福で秩序立った生活を送る。彼の心が喜びと幸福に満ち溢れるのはもっともである。なぜなら妻ほど従順なものはないのだから。」

こう作者が語らせる語り手の商人は、実は悪妻の尻に敷かれており、話を始める前に自分の結婚生活について嘆きをもらしていた。この点からも作者の言葉は皮肉そのものと受けとることもできるのだが、おそらく主人公の老騎士の気持ち

を代弁しているのであろう、得々と妻たる者への賛美、結婚の功徳を説いている。曰く、「妻というものは本当に神の贈り物である」、「妻をめとった男が何ゆえ苦難に会うことがあろうか」などなど。[72]

さて以上のような結婚賛美論を前置きとして商人が続ける話の筋は以下のようなものである。

その名をジャヌュアリ（Januarie、一月）という件の老騎士は自ら、棺桶に片足をつっ込んだような年齢だと認めながらも、「きれいな若い娘」と結婚したいと友人たちに告白する。彼は「私は耄碌していない」と本気で結婚を考えていることを強調し、「私の手足は強く、男がすることは何でも充分によくできる」と豪語する。

彼の兄弟の一人は結婚に反対するが、結局ジャヌュアリは結婚する決意を変えず、とうとう眼鏡に適った娘を見つけ出す。「町にその美しさが大変評判になっている娘がいる。身分は低いが、彼女の若さと美しさだけで充分だ。」こう言ってジャヌュアリは、めでたくマイ（Mai、五月）という名のこの娘と結婚する。

ところが、結婚の披露宴で、騎士の従者ダミアンが新婦に一目惚れ。彼は恋の病にかかって床についてしまう。ダミアンが病気だと聞いたジャニュアリは一足先にマイに見舞いに行かせる。そこでダミアンはかねて思いの丈を書き連ねていた恋文をそっとマイに手渡す。それを読んでマイもすっかりダミアンに同情して心の中でこう思う。「はっきりと言えるわ、誰よりも一番彼を愛しているって。彼がシャツ一枚しか持っていなくても。」彼女はダミアンの気持ちに応える由を手紙に書いてそっとダミアンに渡す。それを読んだダミアンはすっかり元気になる。一方老騎士ジャヌュアリは哀れにも失明の憂き目に会う。そして嫉妬心のために常に妻のそばを離れないようになる。

そんなある日、ジャヌュアリは妻を誘って庭へ行く。庭の入口はジャヌュアリの持っている鍵であけるようになっていたが、マイはかねてからダミアンに合鍵を用意させて持たせてあった。マイはダミアンに合鍵で先に庭へ入っているようにと合図を送り、前もって指示しておいたようにダミアンを梨の木の上に登らせる。

ところでこの庭には時折妖精の王プルートーと女王のプロセルピナが訪れるのだが、この時も彼らは庭を散歩していた。ジャヌュアリに同情する王は「わしの威厳にかけて、この年老いた立派な騎士に、妻が不貞を働こうとする時には、彼の目が再び見えるようにしてやるわ」と宣言する。それに対してプロセルピナはマイに味方して、マイが上手に言い訳できるようにさせると誓う。

さてマイは梨の木の下に来ると、梨が食べたいから登って

取って来たいと言う。こうして首尾よく木の上に登りおおせたマイは、ダミアンとかねてからの思いを遂げるが、その刹那にジャヌュアリは再び目が見えるようになり、この不貞の場面を目撃する。驚き叫ぶジャヌュアリにマイは「あなたの目を治すには木の上で男と取っ組み合うところを見せるのが最も良いと教えられた」と受け答える。「あいつがお前をものにしたのをこの目で見たんだぞ」とジャヌュアリが反論しても、マイは、まだすっかり治り切っていないために見間違えたのだ、とうまく言い逃れる。

こうして老騎士ジャヌュアリは若い妻にまんまと騙されてしまうのである。

二

寝とられ亭主となるジャヌュアリの老齢ぶりは其処彼処に諧謔味を込めて描かれている。たとえば、ジャヌュアリが初夜の床に入る際に様々な精力剤を飲む場面。言うまでもなく老齢による精力不足が揶揄されているわけだが、初夜の床で仕事を終えたジャヌュアリがベッドに座り愉快げに歌を歌う次のような場面には、かなりグロテスクな滑稽さが感じられよう。

歌を歌っている間、彼の首のたるんだ皮が動いていた……（中略）……しかし彼がシャツを着てナイト・キャップをかぶり痩せこけた首をして座っているのを見てマイが心の中でどう思ったかは神様だけがご存知である。彼女は彼の遊戯を一文の価値もないと思ったのである。

また、ジャヌュアリは夏になると自分の庭に妻とこっそり行くが、それは「妻に借りを返す」ためで「ベッドでしなかったことを庭でした」。性的能力の減退ということがここでも暗示されているが、無論、失明という事態も老齢による身体的機能の衰退に他ならない。

このように明らかに老齢ゆえに惨めな情けない様子のジャヌュアリにひきかえ、妻のマイは何と素晴らしいことだろう。

彼女の美しさは言い尽くせないほどだが、こう言っておこう。彼女は五月の輝かしい朝のようにあらゆる美と喜びに溢れている。

こんな彼女の顔を目にすれば、披露宴で夫ジャヌュアリはうっとりと我を忘れ、従者ダミアンは気も狂わんばかりの恋患いにかかる始末。まことに対照的な妻のありようだが、実のところ、この「いとけない若い娘（tendre youthe）と「腰

の曲がった老人（stouping age）」という取り合わせは、全く相入れない、全く相異なる二つの対立物の組み合わせなのである。

そのことは何よりも二人の名前――「ジャヌュアリ（Janu-arie）」すなわち「一月」と「マイ（Mai）」すなわち「五月」――に最もよく表わされていると言えよう。

まず「五月」とは取りも直さず「夏」である。そして季節の移ろいを人生になぞらえる時、「夏」とは「五月」とは「青春」を意味することが明白であろう。

そこでたとえば、シェイクスピアの『空騒ぎ』で、娘の純潔を疑われたレオナートーがクローディオと剣を交えると主張して次のように言う。

この男の巧みな剣術、熱心な稽古、五月の若さ、溢れる活力など物ともしない。[3]

（五幕一場　傍点引用者）

また同じくシェイクスピアの『ヘンリー五世』で、イーリ主教が国王ヘンリー五世のことをこう述べる。

すこぶる強大なわが君はまさしく五月の朝の若さである。

（一幕二場　傍点引用者）

「五月」が「若さ」と結びつく以上、「マイ」という名前はまさしく彼女の若さを表わすものと言えよう。[4]

ところで「五月」あるいは「五月の朝」にはまた「美」の概念も結びついていることを忘れてはならない。先に引用したマイの描写を思い起こしてもらいたい。彼女は「五月の輝かしい朝のように」美しいのである。

実際、太陽が輝き、若葉がおい茂り、色とりどりの花が咲き乱れる五月は、一年中で最も美しい季節と言える。そしてそのような自然美はヨーロッパでは古くからうたわれてきた常套的な主題とも言うべきものであった。特に中世においては宮廷風のロマンスなどを語り始めるのにまず冒頭で五月の朝の描写を行なうというのが定石であって、かの『ばら物語』もその手法を踏襲している。[5]

さて、『ばら物語』や宮廷風ロマンスとの関わりからも推測し得るように、「五月という美しい時」[6]はまた「愛」の概念とも結びついている。この点については「五月祭（May Day）」の行事が有効な手がかりとなろう。「五月祭」は今では「五月柱（May-pole）」のみが有名になってしまったが、かつては「五月の花嫁と花婿」あるいは「五月の王と女王」などと呼ばれたカップルも存在していたことが知られている。この男女のカップルは五月柱同様、植物の精霊を表現したも

のであって、自然の豊饒を恵むものとされていた。[7]

ここで思い起こされるのがシェイクスピアの『夏の夜の夢』である。『夏の夜の夢』では一連の出来事が五月祭前夜を中心として起こるが、五月祭という背景はこの喜劇の主題に全く見事に合致していると言えよう。『夏の夜の夢』には実に四組のカップルが登場する。そのうちの一組、アセンズの森に住む妖精の王と女王、オベロンとタイテーニアは、自然の秩序を司り、まさに「五月の王と女王」そのものと言うべきカップルである。劇は、アセンズの大公シーシュースがアマゾン族の女王であるヒポリタと四日後に婚礼をあげようとしているという情況から始まるが、話の中心は残りの四人の若い男女の恋愛関係であって、様々なごたごたがあった挙句めでたく二組のカップルに収まり、最後はシーシュースたちとともに婚礼をあげる。仲違いをしていた妖精の王と女王も仲直りをして、この三組のカップルの結婚を祝福したところで劇は幕となる。

このように『夏の夜の夢』は五月祭にふさわしく愛と結婚の幸福をうたっているが、『夏の夜の夢』という題名にも注意したい。原題は Mid-summer Night's Dream で mid-summer とは夏至の頃をいう。夏至は六月二十一日頃で一般に五月祭が行われる五月一日とは異なるが、五月祭の行事は場所によって聖霊降臨祭（復活祭から五十日目）や夏至の日にも行われるという。[8] つまるところ「五月」とはやはり「夏」の謂なのである。[9]

他方、「一月」についてはもはや多言は要しまい。「一月」とはすなわち「冬」である。

冬のさびしい寒さとおそろしい闇とは災いそのものであった。[10]

ホイジンガは『中世の秋』の中でこう書いている。太陽も輝かず植物も枯れ果てる「冬」は、美も愛も無縁の大いなる不幸、死の象徴[11]であり、それはまた人生の冬である「老い」とも重なり合う。[12]

こうして明らかに「冬」と「夏」が互いに相剋するものであり、「愛」が「夏」（「五月」）と、すなわち「若さ」と結びつく以上、ジャヌュアリ老人と若いマイの結婚は全くありうべからざることと言えよう。若いマイにはやはり若い恋人ダミアンが似つかわしいのである。

実際、愛の幸福にあずかるのは若者であって老人ではない。十三世紀に書かれた恋愛アレゴリー詩『ばら物語』において、貴婦人の愛を得ようと努める主人公は、中世の他の恋愛詩における恋の冒険者たちと同様若者である。そして彼が入ることのできた愛の庭の中には青春（Jennece）が美などとともに

いるが、庭をとり囲む壁の外側には老年(Vieillece)の絵姿が貪欲などの悪徳とともに描かれている。

ところでこの愛の庭をチョーサーは「商人の話」の中にとり込んでいる。ジャヌュアリの庭がそれで、石の壁をめぐらしたその庭は、「『ばら物語』の作者もその美しさを描くことはできなかったであろう」ほど美しく、不能気味のジャヌュアリが「ベッドでしなかったことを庭でした」ほど愛の力に溢れている。だが本来、庭は若いカップルのためのものであり、ジャヌュアリは庭から排除されるべき人間でしかない。それゆえ時も六月という夏のある日に、マイとダミアンという若い恋人同士は、庭の梨の木の上で愛の行為を行なって、場違いな老人ジャヌュアリをさんざんに愚弄する。ここでは愛の庭も「恋する老人」を戯画化する道具立ての一つとなっているのである。

三

チョーサーは『カンタベリ物語』の中の「粉屋の話」の冒頭で、老人と若い娘の結婚を戒めて、「若さと老いはしばしば互いに争い合う」と述べている。「若さ」と「老い」が互いに敵対するものであるために老人と若い娘の結婚は非である、というこの考えは非常に根強いものであって、[13]若い娘をめとった老人が寝とられ亭主となる話を笑話における一つの典型とならしめている。「粉屋の話」も「商人の話」と同様そうした話の一つであって、オックスフォードに住む主人公の老大工は十八歳の若妻をまんまと寝とられてしまう。

この妻もマイと同様美しく、「世界中を探し回ってもこんなに生き生きとした可愛らしい女を想像することのできるような賢い人はいないだろう」。そんな彼女に言い寄ったのが大工の家の下宿人でニコラスという名の貧乏学生であった。彼はうまく女の心をつかんで、機会があれば彼の自由にさせるという女の約束を取り付ける。問題は嫉妬深い老大工をどうごまかすかである。ニコラスは占星術に凝っていたので、ある日大工に、これはキリスト様のお告げだから誰にも言ってはいけないが、自分の占星術によると次の月曜の夜ノアの洪水より倍もひどい豪雨がやって来て人類は皆溺れて死んでしまう、と嘘を言う。そして大工の夫婦と自分が助かるように、それに乗って漕げるくらいの大きい桶を用意させる。月曜の夜になると三人は屋根裏からつり下げた銘々の桶の中に入る。ニコラスは大工に、かねてから命じておいたように、ただ黙って祈禱するようにと促す。大工は祈禱を続けるうちに深く寝入ってしまい、そのすきにニコラスと大工の妻はこっそりと桶から出てベッドに入り、朝課の鐘が鳴るまで「喜びと楽しみの仕事」にいそしむ。

話はこの後、大工の妻を恋する教会の書記アブソロンがからんだ猥雑な展開を見せるが、最後にニコラスと大工の妻は洪水の一件を大工の妄想だったということにしてうまく事の始末をつけている。

この話は、学のある若い男が老人の無知と信心につけ込んで老人をうまく欺くという次第だが、同様の趣向は、チョーサーよりも三十年ほど前に生まれたイタリアの文人ボッカッチョの『デカメロン』第三日第四話にも見られる。

欺かれる老人はフラーテ・プッチョと呼ばれる信仰心の厚いフィレンツェの金持ちで、その妻イザベッタは例にもれず美人で若くはつらつとしている。彼女は「夫の聖人のような生活ぶりとおそらくその老齢のために」[14]しばしば禁欲生活を強いられていた。そこへ現れたのが、ドン・フェリーチェという若く美しく「明敏な才智と深い学識をもった」修道士。彼はフラーテ・プッチョと親しくなり度々その家を訪れるうちに、その若い妻の欲求不満を見て取る。そして彼女の不満を解消するべく彼女にこっそりと相談を持ち掛けるが、もとより彼女に異存があろうはずもない。そこで修道士はフラーテ・プッチョに、聖者になる近道があるから教えようと言って、夜の間家の中のある一室で磔刑になった格好で空を眺めて立っているという勤行を課す。こうして修道士と若い妻はフラーテ・プッチョが夜の勤行を行なっている間ベッドで「大いなる喜びをもって」過ごしたのであった。

フラーテ・プッチョにしろ老大工にしろ、その無知さ加減には全くあきれるばかりであるが、そもそも知恵のなさ、愚かさは老人の特徴と言うべきものであった。[15]対照的に若者には知恵や賢明さが備わっている。老人が若者にいとも簡単に欺かれるのも無理はないのである。

賢明な若者は無論、間男となる若い男ばかりではない。「商人の話」のように若い妻が知恵者ぶりを発揮する場合もあって、『デカメロン』第七日第九話もその一例である。

この『デカメロン』の話は「商人の話」と似通っている点が多く、貴族で金持ちの老人とその若く美しい妻、それに従者の若者という三人の取り合わせはジャヌュアリとマイとダミアンをすぐに連想させる。ただこの話では若い妻の大胆さ、賢さがより強調されていると言えるだろう。リディアというこの若妻は自分の方から従者のピルロに恋心を打ち明け、その恋心が本物であることの証明として三つの難題を実行することをピルロから要求されると、見事にその難題を実行してしまう。そして予めピルロに宣言しておいたとおり、夫の見ている前でピルロと楽しんで、しかもそれが本当のことではないと夫に思わせてしまう。夫を欺くこの場面は「商人の話」と同様庭で、やはり梨の木が出てくる。ピルロは主人たちのお伴をして一緒に居り、リディアの命令で実を落とすため梨

の木に登る。そして前もってリディアに教えられていたとおり、木の上から下にいる主人たちに向かって、夫婦の交わりが見える、と嘘を言う。リディアは夫に木に登って事の真相を確かめてくるように頼む。夫が登ってしまうとリディアは木の下でピルロと楽しみ始める。驚きあわてる夫にリディアは梨の木の魔力のせいだと言い抜け、最後は証拠が残らぬよう梨の木を切らせてしまう。

何とも見事な知恵者ぶりと言う他はないが、それにしても、このような妻たちの行為が不貞以外の何物でもないのに、なぜ年寄の夫たちは一方的に愚弄されるばかりなのであろうか。それは妻の不貞の原因が他ならぬ夫の側にあるからであろう。『デカメロン』第三日第四話においてフラーテ・プッチョの妻は「夫の聖人のような生活ぶりとおそらくその老齢のために」禁欲生活を余儀なくされたし、『デカメロン』第七日第九話でもリディアがこう言っている。「一つのことを除いては悔しく思うことはないわ。それは私の夫の年齢が私の年齢と比べると多すぎるということなの。そのため私は若い女がもっとたくさん楽しんでいるものを満足に得られずに暮らしているわ。」『カンタベリ物語』の「商人の話」の場合も、ジャヌュアリの性的能力が充分でないことをうかがわせるくだりがあることは先に見たとおりである。結局のところ、老齢による不能が老人の夫と若い妻の結婚生活に不和をもたらすわけで、『デカメロン』第二日第十話はこのことを最もよく知らしめてくれる話と言える。

この話はピサの裁判官[16]リッカルド・ディ・キンツィカが若く美しい娘と結婚したところから始まる。リッカルドは初夜の交わりにもう少しで失敗しそうになるし、その翌朝は葡萄酒や精力剤やその他の様々な薬を飲んで体力回復をはからなければならない始末。そこで彼は一計を案じ、妻のバルトロメアに祝祭日がほとんど毎日のようにある暦を見せて、祝祭日には男女の交わりを避けるべきことを説く。その結果バルトロメアは「ひどい憂うつ」を覚えるが、そんなある日海岸近くで小舟に乗っている最中に彼女は海賊パガニーノにさらわれてしまう。最初は泣いていた彼女も「暦が皮帯から抜け落ち、あらゆる祝祭日のことも念頭にない」パガニーノに慰められて、彼とともに楽しく暮らし始める。リッカルドは彼女の居所を知って連れ戻しに来るが、彼女は一緒に帰ることを拒む。「あなたは私が若く生き生きとして活力があることを理解し、それゆえ若い女には衣服や食物の他に、恥ずかしさのために口には出さなくとも何を欲しがるのかを知っているべきでした。」こう言い放つバルトロメアをとうとう翻意させることができずにリッカルドはただただ「若い妻を選んで結婚した自分の愚かさ」を悟ってピサに帰る。[17]

ところでプルタルコスはこう言っている。

結婚の適齢とか時期とかだがね、男にしても女にしても、子を産むことができ、子を産むことに向いている時が適齢だ。[18]

このプルタルコスの「真理」とでも言うべきものが中世にも受け継がれていることは明らかであろう。老人はその不能ゆえに結婚には不適格な者であり、結婚した老人は寝とられ亭主にされることによって「真理」を知らないでいた愚かさを笑われるのである。

この、愚かで滑稽な老亭主たちがいかに中世の人々の心に強く焼きついていたかは、聖母マリアの夫ヨセフの戯画化現象に見ることができよう。中世後期の美術や文学においてマリアがますます高められていく一方でヨセフがますます戯画化されるという相反する傾向があったことについては、ホイジンガも言及しているが[19]、石井美樹子氏の紹介するイギリス中世のサイクル・プレイと呼ばれる民衆劇[20]においてもヨセフの戯画化は見逃し得ない顕著な事実である。

たとえば、ヨセフがマリアの懐妊を知って若い妻を持ったことを嘆くくだり。

老いぼれじじいに若い女とは、まったくもって悪い組み合わせさ、
わしにはわかっておる、わしは不能だ、
それで、他の男がマリアをたぶらかしたのだ。[21]

このようにヨセフが不能の老いぼれとされたことは確かに「マリアの純潔を強調するためには都合がよかった」[22]ことには違いない。が、それはむしろ、ヨセフが寝とられ亭主として戯画化されるための必要条件と言うべきものであったろう。

ともあれ、世俗化され戯画化されたヨセフのイメージは、寝とられ亭主のそれであることは間違いない。

スタンダールは「最も貴重な権利に関して欺かれた夫たち」[23]が豊かな笑いの源泉となっているのは「欺かれた夫というものが我々の憐憫に値するとは思われにくい」[24]からだと述べたが、中世の「欺かれた夫」たちを見ていくと、結局のところ「恋する老人」というものが憐憫に値するものと考えられていないことがわかるだろう。「恋する老人」はローマ喜劇の老人や中世の寝とられ亭主という役柄を次々に演じながら、西洋の笑いの豊かな源泉の一つとなっているのである。

（以下次号）

註

（1） 以下『カンタベリ物語』からの引用は、*The Complete*

Works of Geoffrey Chaucer, Edited by Walter W. Skeat, Oxford University Press, 1912による。

(2) このように長々と結婚について論じているのは『カンタベリ物語』の他の語り手、バースの女房にしても同様である。中世の社会において如何に結婚や夫婦の問題が重要な関心事であったかを示す一端と言えよう。ちなみに『カンタベリ物語』では「商人の話」を含む一群の話が結婚を主題とする話として分類されている（桝井迪夫『チョーサー研究』、研究社、昭和三十七年、一七二頁を参照）。

(3) 以下シェイクスピアの作品からの引用は New Penguin Shakespeare による。

(4) 「夏」も無論「若さ」と結びついている。たとえば、その若さを強調するように繰り返し fresshe May（みずみずしいマイ）と書かれているマイについて、次のような描写がなされている。「マイは輝かしい夏の日のようにみずみずしい」またシェイクスピアのソネットにおいて青春は夏にたとえられている。拙稿「シェイクスピアと老い」『比較文学・文化論集』第五号、昭和六十二年十二月、二頁を参照。

(5) 古くは五世紀から六世紀にかけて生きたエンノディウスの作品にこの手法が見られるという。Cf. C. S. Lewis, *The Allegory of Love*, Oxford University Press, 1958, p.77.

なお、「夏」と「美」の結びつきについては、たとえばシェイクスピアの『ペリクリーズ』第二幕第五場においてペリクリーズがペンタポリスの王サイモニディーズにその娘セイザのことを次のように語っている。「夏の美しい日のように驚くほどにお美しい。」

またシェイクスピアのソネットにおいて夏は青春のたとえであると同時に美のたとえにもなっており、ソネット十八番の冒頭で詩人は美貌の青年に対して「君を夏の日にたとえようか」とうたっている。

(6) Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, Paris, Librairie de Firmin-Didot et Cie, 1920, t. II, p.151.

(7) 五月祭については、Sir James George Frazer, *The Golden Bough*, abridged edition, The Macmillan Company, New York, 1951, pp. 139–156. を参照。なお、「五月」と「愛」の結びつきについては、C・S・ルイスも言及している（C. S. Lewis, *op. cit.* p. 120）。

(8) 前注にあげたフレイザーの五月祭についての記述を参照。

(9) 「五月」と「夏」が同一物であることについては Sir James George Frazer, *op. cit.* pp. 365–366. を参照。

(10) ヨーハン・ホイジンガ、堀越孝一訳『中世の秋』上巻、中公文庫、昭和五十一年、十一頁。

(11) 四旬節の第四日曜日（三月二十一日頃）に行なわれる、冬を送り夏を迎え入れる行事において、「冬」は「死」と呼ばれている。Cf. Sir James George Frazer, *op. cit.* pp. 357–367.

(12) シェイクスピアのソネットにおいて冬は老いのたとえとなっている。注（4）を参照。

(13) たとえば、シェイクスピアの『夏の夜の夢』第一幕第一場におけるライサンダーとハーミアのやりとり。

ラ …まことの恋が平穏に進んだためしがない。
身分が違っているとか ——

ハ まあ、ひどい、身分が高すぎて低い人と恋をすることもできないなんて。

ラ あるいは齢が合わないとか ——

ハ まあ、いやだ、齢をとりすぎて若い人と結ばれないなんて。

(14) 以下『デカメロン』からの引用は、Giovanni Boccaccio, *Il Decameron*, Bari, Editori Laterza, 1966, 3vols. による。

(15) 前掲拙稿、四頁を参照。

(16) 裁判官という職業はリッカルドが老人であることを示唆している。拙稿「「老いらくの恋」・東西の系譜（二）」『比較文学・文化論集』第四号、昭和六十一年十二月、二頁参照。

(17) この話をほぼそのまま取り上げてラ・フォンテーヌは *Le Calendrier des Vieillards*（「老人の暦」）という話を書いている（Jean de La Fontaine, *Contes et Nouvelles*, 2e partie, VIII）。

(18) プルタルコス、柳沼重剛訳『愛をめぐる対話』、岩波文庫、昭和六十一年、二九頁。

(19) ヨーハン・ホイジンガ前掲書、三〇九、三三九－三四三頁。

(20) 石井美樹子『中世劇の世界』、中公新書、昭和五十九年。

(21) The Towneley Plays, ed. George England & A. W. Pollard, EETS, London, 1897, rept. 1952. p. 91. なお訳は同右書中の引用による。

(22) 石井美樹子、前掲書、七八頁。

(23) Stendhal, *Du Rire, Essai philosophique sur un sujet difficile* dans *Racine et Shakespeare, Oeuvres Complètes*, t. 37. Cercle du bibliophile, 1970. p. 181.

(24) *Ibid.*